全てを恨んで死んだ悪役令嬢は、巻き戻ったようなので
今度は執事を幸せにします

Characters
「私、今度の人生では
あなたに恩返しするために
生きるから！」
「お嬢様。
何をおっしゃっているんですか？
お嬢様も私も
死んでおりませんよ？」
エヴェリーナ・アメル
公爵家の令嬢として奔放に育ってきたが、
その結果として罠に嵌められてしまった。
自分の代わりに処刑されたサイラスの
ために今世を生きると決意する。
サイラス・フューリー
忠実で一途な執事。エヴェリーナのことを
幼いころから見守ってきた存在。
婚約破棄してからの彼女の様子が
おかしいのを心配している。
ミリウス・
ハーディング
王国の第二王子。カミリアの
ことを気にしていて、エヴェリーナを
敵視していたが……？
ルディ・
クレスウェル
前世でエヴェリーナを
罠に嵌めた公爵令息。
狡猾で嫉妬深い。
とある因縁が
エヴェリーナ周りにある。
ジャレッド・
ハーディング
王国の第一王子。
短気で傲慢。
やや子供っぽい
ところもある。
カミリア・ロット
この世界の聖女。
人を利用したり切り捨てたり
することに抵抗がない。

プロローグ

「ごめんなさい……私が間違ってたわ……」
ナイフを握りしめ、もう何度目かわからない謝罪の言葉を口にした。
いくら謝ったところで私の言葉は届かない。
あんなに執着していたはずの王子殿下のことが、今はもうどうでもよかった。
ただ、私の身代わりになって死んでしまった、執事のサイラスのことばかりが頭を巡っている。
サイラスはあんなに私を大事にしていてくれたのに。私がいくら落ちぶれようと決して見捨てなかったのに。
それに感謝することもしないまま、彼を死なせてしまった。
「ごめんなさい。ごめんなさい、サイラス……」
涙が後から後から溢れて止まらなかった。
心配してハンカチを差し出してくれるサイラスはもういないのだと思ったら、余計に涙が溢れてくる。
いなくなってから一番大切な人が誰だったか気づくなんて、私はどこまで愚かなのだろう。

私は静かにナイフを自分の胸に突き立てた。
もしも次の人生というものがあるのならば、どうかサイラスが幸せになれますように。
サイラスが幸せになってくれるなら、私はどうなっても構わないから。
鋭い痛みとともに真っ赤な血が溢れてドレスを染めていく。
意識がだんだんとぼやけていった。
朦朧とする意識の中で、私はゆっくりと目を閉じた。

第一章　二度目の世界

「エヴェリーナ・アメル！　貴様はカミリアに嫉妬して、私の見えないところで散々嫌がらせしてきたそうだな。お前のような女を王妃にするわけにはいかない。婚約は破棄させてもらう！」
王宮で行われたパーティーの最中、私の目の前で、ジャレッド王子は聖女カミリアの腰を抱きながら言った。怖い顔をしているジャレッド王子の腕の中で、カミリアは目を潤ませている。
なんでも、私との婚約を破棄し、新たに聖女カミリアと婚約をし直すつもりらしい。
予想通りの光景だ。
いや、記憶通りと言うべきか。
二度目のことなので、前回のように動揺はない。

演劇でも観るような気持ちで、私は二人をじっと眺める。
私の反応が悪いからか、王子はさらに語気を荒らげ、拳を握りしめて言った。
「カミリアが涙ながらに教えてくれたんだ。お前に階段から突き落とされたり、取り巻きを引き連れて暴言を吐かれたりしたと……。聖女であるカミリアにそのような非道な行いをするなど、とうてい許されることではない。二度とカミリアに近づくな！」
そんなに言わなくても、私の答えはすでに決まっているのに。
私は、彼の言葉がようやく途切れたタイミングでにっこり微笑んだ。
「わかりました。婚約破棄、謹んでお受けいたします。カミリア様にも近づきません。お二人とも、どうぞお幸せに」
淑女らしい礼もつけてみる。
顔を上げると、王子もカミリアも、周りの人たちもぽかんとした顔でこちらを見ていた。
……よし、もう十分だろう。こんな所で長居している場合ではない。私には会いに行かなければならない人がいるのだ。
彼らが停止しているのをいいことに会場を出て、王宮の廊下を、ひたすら走る。ドレスを着ているせいで速く走れないのがもどかしい。
早く、早く行かなきゃ。本当に会えるのだろうか。本当にここにいるのだろうか。
心臓が痛いほどばくばく音を立てている。
「お嬢様！」

すると、廊下の向こうから、執事服を着たブラウンの髪の青年——サイラスが私を呼んだ。私の執事にして、前世の最大の後悔の種。
懐かしいその姿に息が止まりそうになる。
ずっと会いたかった人。本当に会えた！
「サイラス！」
足がもつれそうになるのも構わず走り、私は思いきり彼の胸に飛び込んだ。
「お、お嬢様？　急に何を……」
「ああ、サイラス。会いたかった」
動揺するサイラスに構わず、ぎゅうぎゅう力を込めて抱きしめる。サイラスの声。なんて懐かしいんだろう。目頭が熱くなってくる。
「お嬢様、一体どうなさったのですか。私などに抱きついてはいけませんよ」
「いいじゃない。すっごく久しぶりなんですもの」
「久しぶり……？　今朝だってお屋敷で顔を合わせたではないですか」
抱きついたまま見上げると、サイラスは困った顔をしていた。私は何も言わず頬を緩めてその顔を見つめる。夕日のように赤い瞳がまっすぐ私を見つめ返す。
「エヴェリーナお嬢様。先ほど侍女が駆けてきて、ジャレッド殿下がお嬢様との婚約を破棄なさったと教えてくれました。……そこまで混乱なさるほどショックだったのですね」
サイラスはそう言って、会場の扉を悔しげに睨みつける。その表情を見て胸が締めつけられた。

そうだった。サイラスはずっと私の婚約を心配してくれていた。前世の私がジャレッド王子に夢中で、そのことに気がつかなかっただけで。

私は首を横に振り、微笑んだ。

「そうなの。パーティー会場でジャレッド王子に、私との婚約は破棄するって言われちゃった。新しいお相手はカミリア様になるんですって。でも、そのせいで混乱なんてしてないわ」

「なっ」

サイラスが驚いたように目を見開く。私は笑顔で首を横に振り、またぎゅっと彼を抱きしめた。

「本当よ。婚約破棄のことなんて全く気にしてないの」

「しかし……ジャレッド殿下、公の場で婚約破棄するなど、絶対に許せません……！　聖女様もそのような他人の婚約者を奪うなど……」

「気にしないで。せっかくやり直すチャンスをもらったんだから、婚約者に捨てられたことも、冤罪をふっかけられたことも気にしないことにする。私、今度の人生ではあなたに恩返しするために生きるから！」

「えええ……？」

サイラスは目をぱちくりさせて呆然としている。私はそんな彼の表情を見られることすら嬉しくて、ただにこにこ笑っていた。

第二章　恩返し

「お嬢様、本当にどうなさったのですか？」

王宮を出てアメル公爵家の馬車に乗り込むと、サイラスは困惑した顔で口を開いた。

私はサイラスが隣にいるのが嬉しくてたまらず、よくわからない返事ばかりしていた。

夢みたいだ。もう二度と会えないと思っていたのに。

サイラス・フューリーは、子供の頃からずっとアメル公爵家で働いてくれている私の専属執事だ。アメル領の街の一つにある大きめの服飾店の次男で、私より一つだけ年上の十九歳。

今から十年前、私のお父様はアメル家の忠実な使用人になれる子供を探していた。そこで、ちょうど訪れた服飾店の息子のサイラスを気に入って連れてきたのだ。

利発で忠実そうなところが気に入ったのだとか偉そうに言っていた。

お父様はアメル家でのサイラスの働きぶりを見てさらに気に入り、私の専属執事にした。なので、私は子供の頃から彼に世話を焼かれながら過ごしてきた。

子供の頃の私は本当にサイラスが大好きで、何をするにもぴったりくっついて過ごしていた。サイラスも忙しかったはずなのに決して邪険にしたりせず、たくさん遊んでくれた。

それなのに、馬鹿な私はいつしかサイラスのことを見なくなっていった。

　王宮の廊下を歩く間も馬車に乗っている間も、私がサイラスの腕を捕まえて片時も離さなかったので、サイラスはすっかり困りきっているようだった。
「お嬢様、あの、腕を離していただけるとありがたいのですが……」
「嫌？　サイラスが嫌なら我慢するわ」
「いえ、むしろ嬉し……いや、そうではなくてですね。アメル公爵家のご令嬢が執事に気安く触れてはいけませんよ」
　サイラスは困った顔のまま言う。
「そんなこともういいじゃない。公爵令嬢といったって、王子殿下に婚約破棄されて聖女様に敵認定されてしまったのよ？　もう大した価値がないわ」
　私が晴れ晴れした気持ちで言うと、サイラスは顔を青くしながら否定してきた。
「そんなことは……！」
「そんな顔しないで。私、もうジャレッド殿下のことなんて本当にどうでもいいんだから」
「しかし、お嬢様はあんなにジャレッド殿下のことをお慕いしていらっしゃったのに」
「ジャレッド殿下を慕う気持ちなんてとうに消え失せたわ。さっきも言った通り、私これからはあなたに恩返しするために生きるの」
　きっぱりそう言うと、サイラスは戸惑ったように首を何度か横に振った。
「お嬢様に恩返ししていただくようなことはしておりません。むしろ恩を受けてきたのは私のほうです」
　まっすぐ見つめられて胸が痛んだ。
　やはりサイラスは一度目の世界のことを覚えていないのだ。
　多分覚えていないだろうと思ってはいたけれど、それでも少し寂しくなる。
「サイラスはやっぱり覚えていないのね……。あのね、実は私一回死んでいるのよ。サイラスが私のために死んでしまったから悲しくて悲しくて、あなたの想いを無駄にするようで申し訳なかったけれど、耐えられなくなって胸にナイフを突き立ててしまったの。本当にごめんなさい」
　思わずそう言うと、サイラスは信じられないものを見るような目で私を見つめた。
「お嬢様。何をおっしゃっているんですか？　お嬢様も私も死んでおりませんよ？　やはりショックが」
「違うって言ってるじゃないの！　女神様は自分の命を粗末にした私なんかを憐れんでくださったみたいなの……！　一度死んだ私を、サイラスが死ぬ前の世界に戻してくれたのよ！」
「お嬢様、一度ゆっくり休まれたほうがいいのではないでしょうか」
　サイラスは悲しそうな顔でこちらを見て、気遣うように言う。
「違うんだってば！　私は今までにないくらい元気よ！　ほら、もうお屋敷に着いたわ。早く降りましょう」
「ええ……？」
　私はわけがわからないという顔をしているサイラスの手を引っ張って、馬車から降ろした。

アメル邸の大きな門をくぐり、お屋敷の敷地内に足を踏み入れる。
私の生家であるアメル家は、リスベリア王国に四つしかない公爵家のうちの一つだ。だから王太子の婚約者に選ばれたのだけど、それはもう過ぎたことだ。
「お嬢様、ひとまず旦那様のところへ行って今日会場で起こったことの相談をしませんか」
「そんなこと後でいいわ！　私はサイラスをもてなさなければならないの。サイラス、ちょっとここで待っててね。すぐに戻ってくるから！」
「えっ、お嬢様！」
私は応接間までサイラスを引っ張っていき、強引にベルベットのソファに座らせると、すぐさま厨房に向かった。

＊＊＊

準備ができたので、厨房から応接間まで戻る。
応接間では、サイラスが私に座らされた体勢のまま所在なさそうにしていた。私は彼の手を引いてダイニングルームまで連れていく。
「さぁ、中へどうぞ！」
サイラスは私に手を引かれながら、わけがわからないという顔をしていた。
「お嬢様。これは一体どういうことでしょうか……」
サイラスが、呆気にとられた様子で言う。
ダイニングルームのテーブルの上には溢れ返るほどの料理が並んでいたからだ。
私の昼食用だった仔牛肉のステーキにオニオンスープ、野菜のロースト、クリームパイ。デザートにはプディングと小さな砂糖菓子をたくさん出してもらった。
先ほど厨房に駆けていって、思いつくままにシェフに用意してもらったものだ。
「サイラスは何が好き？　全然知らなかったから、できるだけ色んな種類の料理を出してもらったの」
扉の前でぽかんとしていたサイラスを無理やり椅子に座らせながら、私は言う。
サイラスは私の好みを熟知してくれているというのに、私の方は彼の好きなものをよく知らなかった。改めて私はサイラスにしてもらうばかりだったのだと反省する。恩返しするためにも、これからはサイラスの好みをちゃんと把握していかなくてはならない。
「いや、お嬢様。ちょっと……」
「好きなだけ食べて。それでどれが好みか教えてね。リクエストがあればなんでも言ってちょうだい！」
「いえ、お嬢様！　こんないいものをいただけません。そもそも勤務中ですから」
がっしりと肩を押さえつけると、私を振り払うわけにもいかないようでサイラスは困りきった顔をしている。
私は彼の隣に立つと、ふふんと胸を張った。

「勤務中？　大丈夫よ。あなたは今日から仕事をしなくていいわ」
「え？　どういうことですか？」
「あなたの仕事は別の人を雇ってやらせるから。あなたはもう何もしなくていいの」
「それはクビということですか!?」
にっこり笑って言うと、サイラスは顔を青ざめさせて言った。予想外の反応に私は口を尖らせる。
「違う！　あなたはただここにいてくれればいいのよ」
「そういうわけにはまいりません。私は執事として雇われているのですから」
「私からお父様に言っておくわ。サイラスには今日から何もやらせないでって」
「お嬢様、本当にどうなさったんですか……!?」
笑顔で提案したのに、サイラスは絶対にだめだと言って譲らない。
しばらく問答したが、全く折れてくれそうにないので諦めることにした。
仕方ない。サイラスが執事の仕事をする傍ら、私がもてなすしかないようだ。
けれどせめてこの料理だけでも食べてほしい。なかなか料理に手をつけないサイラスに、私はスプーンでスープを掬って口に運ぶ。
「サイラス。はい、あーん」
「お、お嬢様、おやめください。そのようなことをしていただくわけには」
「せっかくシェフが作ってくれたのよ。さぁ、早く食べて」
私がぐいぐいスプーンを口に近づけると、サイラスは顔を赤くしておろおろする。それから観念

したように口を開いてスープを飲み込んだ。
「……おいしいです」
赤い瞳がふわりと緩む様子にホッとする。ご飯を食べて顔をほころばせているサイラスをまた見られるとは思わなかった。
「本当？　……よかった。夜もサイラスの分を用意してもらうから、今日から使用人用の食堂じゃなくてダイニングルームで一緒に食べましょうね！」
「お嬢様、これでもう十分です！　これ以上はお許しください……！」
サイラスがあんまり困った顔をするので、ダイニングルームで一緒に食事をするのも諦めることになった。サイラスに喜んでほしいのだから、彼を困らせることをしたくない。
でも、自分で思いつくのはそんなことばかりだった。
「次は新しいあなたのお部屋を用意したいのだけど」
サイラスが料理を食べ終わると、私はおずおずと言った。
サイラスは首を傾げている。
「部屋？　お部屋ならすでに使用人寮の一室をいただいておりますよ」
「使用人寮の部屋ではなくて、もっといいお部屋を用意してあげたいの」
私はそう言ってサイラスの手を引いて歩きだした。
階段を上り廊下の奥へ進み、ドアの前で立ち止まる。私はメイドに支度をさせた部屋を指さした。
「ここなんてどうかしら？　家を出た二番目のお兄様が使っていたお部屋よ。模様替えをすれば使

えると思うわ」
今度こそは気に入ってくれるはず。
そう思って、ドアを開けてみてほしいと言っても、サイラスはかしこまるばかりだ。
「何をおっしゃっているんですか……！　ご子息様が使っていたお部屋を使用人が使うなんて聞いたことがありません」
「サイラスはただの使用人じゃなくて私の命の恩人なのよ。このくらいの待遇を受けて当然よ。むしろ全然足りないくらいだわ」
「命の恩人ってなんですか。私はお嬢様にそこまでしていただくようなことをしておりません……！」
サイラスは戸惑いきった顔で言う。
本当はその戸惑った顔すら嬉しい。サイラスにお嬢様と呼ばれるだけですごく嬉しい。
生きてサイラスと話していること自体が、夢みたいに幸せだった。でも、その喜びは説明しようがない。私にはサイラスに返しきれない恩があるのに、この世界でそれを言ったってわかってもらえるはずがないからだ。
――けれど、何としてでも恩返ししなければ。
今度こそ、サイラスにはめいっぱい幸せになってほしいのだから。
「お嬢様、本当に私は何もいりませんから。今受けている待遇で十分です。お気持ちだけ受け取っておきます」

サイラスは少しかがんで私と視線を合わせると、子供をあやすように言った。どうやらお部屋をあげる作戦も断念するしかないようだ。
その後も私は、欲しい物はないかと街の有名店から商人を呼んでみたり、私の部屋にある宝石や美術品などを持ってきてどれが欲しいかと尋ねてみたりした。
しかし、全て断られてしまった。
品物より現金の方がいいのかと思い、金貨を渡そうともしてみたが、それすらも拒否される。
早く恩返しがしたいのに。一体何なら喜んでくれるんだろう。
「……もう、なんで何も受け取ってくれないの！」
もうあげるものを思いつかなくなり、自室で涙目になって叫んだ。横ではサイラスがくすくす笑いながら紅茶を淹(い)れている。
私のもとに、紅茶の入ったカップをすっと差し出しながら、サイラスが微笑んだ。
「お嬢様。私はお嬢様に尽くす立場の人間です。お嬢様に何かを頂戴することなどできません」
「私があげたいと言っているのに？」
諭(さと)すように言われ、私は口を尖らせる。
「ねぇ、一体何なら受け取ってくれる？　私はサイラスに喜んでほしいのよ」
「お心遣いは大変ありがたいのですが……」
サイラスはまた困った顔になる。それからふいに目を泳がせると、躊躇(ため)いがちに言った。
「では、一つお願いしてもよろしいでしょうか。ずっと夢見ていたことがあるのです」

やっと要望を口に出してくれた。これでやっと恩返しができる！
ようやくの有力情報に、思わず身を乗り出して尋ねる。
「もちろんよ！　なになに？」
「お嬢様と一緒に街へ行きたいのです。ついてきてくれますか？」
サイラスは恥ずかしそうにそう言った。あまりにも簡単な頼みに拍子抜けしてしまう。
「もちろんいいわよ。けれど、そんなことでいいの？」
「はい。望みを聞いてくださるなら、ぜひお願いしたいです」
「サイラスがいいならいいけど……」
腑に落ちないまま了承する。もっと贅沢を望んでくれればいいのに。利用価値がなくなったとはいえ、せっかく公爵家の娘なのだ。私は昔からそれほど散財するタイプでもなく、月々に自由にできるお金が降り積もっている。
そんな私がなんでも頼みを聞くと言っているのに、サイラスは欲がなさ過ぎる。
「ありがとうございます。楽しみにしています」
でも、サイラスは私の返事を聞いて、とても嬉しそうに笑った。
巻き戻ってから見た中で一番幸せそうな笑顔。
その顔を見たら腑に落ちないながらも、まぁいいか、と思ってしまった。

翌日、サイラスと街へ向かう。

サイラスはいつもの執事服ではなく、白いシャツにダークグレーのベスト、黒のズボンというシンプルな格好をしている。
私のほうも街に出るには邪魔だろうと思い、いつも着ているような煌(きら)びやかなドレスはやめにして、薄緑色のワンピースにショールを羽織るだけの格好をしてきた。
馬車を降りると、さらりとサイラスが私の手を取った。
「お嬢様、今日は私のわがままに付き合っていただいてありがとうございます」
「いいえ、こんなのちっともわがままではないわ。どこか行きたい場所があるの？」
「特に行きたい場所はないのですが……お店を見て回りたいです」
「わかった。じゃあ、入りたいお店があったら言ってちょうだい。欲しいものがあったらなんでも買ってあげるわ」
そう言うと、サイラスは素直に「ありがとうございます」とお礼を言った。
あまりに簡単なお願いに拍子抜けしてしまったけれど、考えてみれば街歩きも悪くないかもしれない。これならサイラスの好きそうなお店に入ってたくさんプレゼントを買ってあげることができる。私があげたいものを押しつけるよりもずっといいはずだ。
そう思っていると、早速サイラスが一軒のお店の前で足を止めた。
「あ、お嬢様！　ここに入りたいです！」
「いいわよ。……って、え？　ここに入りたいの？」
「はい！　行きましょう、お嬢様」

サイラスは笑顔で手招きする。水色の屋根に白い壁のかわいらしい建物。そこは明らかに女性向けのアクセサリーのお店だった。
　誰かにあげたい物でもあるのだろうか。姉妹……はいなかったはずだから、もしかすると恋人とか？
　私としてはサイラス本人が使う物をプレゼントしたかったけれど、まぁそれでもいいか。
ちょっともやもやしながらも自分を納得させ、私はそのお店のドアをくぐった。
「わあ……」
　店の中は若い女の子たちで混み合っていた。彼女たちは棚の上に並んだ色鮮やかな髪飾りやアクセサリーを見て、楽しげに話している。
　普段私が買い物するときは、お店の人間が家にやってきて、ビロード張りの小箱に厳選されたアクセサリーを見せてくる。公爵家に、そして自分の年齢と立場にふさわしいものを、と考えたら選択肢なんてないに等しい。
だから、誰も彼もが嬉しそうにアクセサリーを選ぶ光景が、私にはとても眩しく映った。
その光景をぼんやり見ていると、サイラスの手が私の肩に触れた。
「お嬢様、こちらのブレスレットはいかがですか？　お嬢様によく似合いそうです」
　差し出されたのは、白い花がいっぱいに並んだデザインのブレスレットだ。
貝のビーズでできているらしいそれは、窓からの光をはじいてきらきらと輝いている。
「まぁ、綺麗……って、私のじゃなくて！　自分の欲しい物を探しなさいよ」

「あはは、ここには私が使えそうなものは売っていませんよ」
「え、じゃあどうして来たの？」
　サイラスは私の質問に笑うだけで答えない。
そしてどんどん新しいアクセサリーを持ってきて、「こちらはどうですか？」「こちらも似合いそうですね」なんて言いながら、次々と私に試させる。
　私の買い物をする予定ではなかったので戸惑ってしまう。けれど色んなアクセサリーを試しているうちに、なんだかわくわくしてきた。
　このお店に置いてあるアクセサリーはどれも良心的な価格で、私が普段身につけている物とは大分質が違う。色鮮やかでカラフルで、ちょっとチープで、とても可愛い。
　実を言うと平民の女の子たちがこういう髪飾りやブレスレットをつけているのを見て憧れていたのだ。お父様に叱られるから絶対に口には出せなかったけれど、一度こんなお店に入って自由に買い物してみたいと夢見ていた。
　お店に入ってしばらくする頃には、私はすっかりアクセサリーを見るのに夢中になっていた。
「あぁ、すっごく楽しかったわ！」
　可愛いアクセサリーをたくさん見て、すっかり満足して店を出る。
　興奮してつい声を上げると、サイラスは嬉しそうに私を見た。
「お嬢様、以前からこのようなお店に入りたそうにしていましたもんね」
「え？　気づいていたの？」

「お嬢様はわかりやすいですから」
サイラスはそう言って笑った。興味があるのは隠していたつもりだったのに、バレていたなんて恥ずかしくなる。もうちょっと表情に出さないように気をつけないと。
いや、でももう王子の婚約者でもないのだし、感情を隠す必要なんてないのかも？
そんなことを考えていたら、サイラスが遠慮がちに小さな紙袋を差し出してきた。
「あの、お嬢様。よろしければこれを……」
「え？　なぁにこれ？」
受け取って中を見ると、そこには赤い薔薇に紫のリボンのついた髪飾りが入っていた。先ほどお店で見て一番気になっていたものだ。いつの間に買ったのだろう。
「これは……」
「お嬢様が身につけるような物ではないかもしれませんが、熱心に見てらっしゃったので……！　その、つけていただかなくても」
サイラスは顔を赤くして慌てたように言う。その様子を見ていたら、なんだか気持ちがふわふわしてきた。
「嬉しいわ。ありがとう」
私はうきうきした気分で髪飾りを取り出し、早速髪につけてみた。
「似合うかしら？」
そう尋ねたら、サイラスは驚いたように目を見開いた後、なぜだか泣きそうな顔になった。

どうしてそんな顔をするのかと私が慌てていると、サイラスは柔らかな声で言ってくれた。
「はい、とても似合っております」
サイラスがあんまり優しい目をするので、なぜだかどぎまぎしてしまった。

その後、私たちはひたすらお店を見て回った。
今日はサイラスのために来たので、男性向けの洋服や雑貨を売っているお店を見かける度にここに入りましょうと促した。しかしサイラスは一応お店に入ってはくれるものの、欲しい物も言わずに短時間で出ようとしてしまう。
そのくせ、サイラスは私の好きそうなお店を見つけるとすぐに入りましょうと誘ってきて、そちらでは何十分でも私に似合いそうなものを勧めてきた。
「私の買い物に来たんじゃないって言ってるのに」
「すみません。お嬢様に似合いそうな商品がたくさんあるもので」
サイラスは謝りつつも、やっぱり自分向けの商品を置いてあるような店には目を向けようとしない。
いつの間にか、サイラスの腕には大量の荷物が抱えられていた。どれも私に買ってくれたものばかりだ。
せめて荷物くらいは自分で持つと言っても渡してくれない。
これではちっとも恩返しになってない。

今日のサイラスは執事として同行しているわけではないのに。
「お嬢様、ありがとうございます。今日は人生で一番いい日です」
それなのに腕いっぱいに荷物を抱えながら、サイラスは幸せそうに隣を歩いている。
「こんなのが楽しいの？」
「はい。ずっとお嬢様とジャレッド殿下が一緒に出かけるのを見てうらやましかったんです。お嬢様のおかげで夢が叶いました」
あんまり嬉しそうに言うので、それならいいのかななんて思ってしまう。
それにしてもサイラスはそんなに私と一緒にお出かけしたかったのね。なんだか可愛い。前回の人生でも街歩きくらい付き合ってあげればよかった。
ジャレッド王子のことばかり考え、サイラスには荷物ばかり持たせていた前世がよぎり、慌てて頭を振る。
私は胸を張って、サイラスに微笑みかけた。
「お出かけくらい、いつでも付き合ってあげるわ」
「え……っ、いいのですか⁉　あ、いえ、お嬢様に何度も時間を使っていただくわけにはいきませんから！」
サイラスは嬉しそうに言った後、慌てたように首をぶんぶん横に振っていた。遠慮しなくてもいいのに。
その時、後ろから囁くような声が聞こえてきた。

「ねぇ、あれもしかして……」
「アメル公爵家のエヴェリーナ様じゃない。どうして平民みたいな服を着てこんな街中で」
「一緒にいる男性は誰かしら。貴族には見えないけれど」
振り返ると、ドレスを着て日傘を差したご令嬢たちがこちらを見てひそひそ話していた。そばには馬車が停まっている。
どこかの貴族のご令嬢たちが街に出向いてきたのだろう。私が視線を向けると彼女たちは一斉に目を逸らした。
「お嬢様、どうかなさいましたか？」
「いいえ、なんでもないの」
私は笑顔で言う。サイラスの耳には届かなかったようだし、つまらない話を聞かせることはない。促されるまま店の扉をくぐろうとした。
「エヴェリーナ様、ジャレッド殿下に婚約破棄されて気が変になったんじゃないかしら」
後ろから吐き捨てるようにそんな言葉が聞こえた。私は振り返らずに、笑顔のままでお店に足を踏み入れた。

＊＊＊

「お嬢様、今日はありがとうございました。一生の思い出にします」

日が暮れ始めた頃、サイラスは大荷物を抱えたまま満面の笑みで言った。結局、サイラスへのプレゼントは一つも買えていない。
「ちょっと待ってよ。今日はあなたにプレゼントを買うはずだったのに、私の買い物ばかりになっていたじゃない」
「私は特に欲しい物はないので……。お嬢様と一緒に買い物ができて幸せでした」
「私は納得してない！　ちょっと待ってなさい。今馬車を呼ぶから」
そう言ってから、通信機付きのペンダントを開いてアメル家の馬車を呼び出した。ついでにこれから行く予定の場所にも連絡を入れる。
「お嬢様？　どこに行くのですか？」
「このままでは終わらせないわよ。まだ付き合ってもらうから」
不思議そうなサイラスに特に説明はせず、私は迅速にやってきた馬車の中へと彼を押し込んだ。
先ほどまでいた街から反対方面に向かい、貴族の多く暮らすエリアまで向かう。
いくらも経たないうちに貴族用の服を取り扱う服飾店に到着した。まるで小さな宮殿のように見える建物の前では、このお店のオーナーが笑顔で待っていた。
馬車から降りると、状況の呑み込めていない顔をしているサイラスの背中を押す。
「さぁ、サイラス。中で服を買いましょう。あなたに似合うものを用意してあげます」
「お嬢様、このような高級店で買い物をするのは金銭面で少々私には厳しいのですが……」

「私が払うに決まってるでしょう。さぁ、早く入って」
私は困惑するサイラスを無理やり店内に押し込む。そして彼に似合いそうな服を選んでオーナーに預けた。サイラスに着せるよう頼むと、オーナーは快く了承してくれる。
サイラスは戸惑い顔のまま、彼に引っ張られていった。
店内のスタッフに案内してもらい、休憩室のソファに腰掛けてしばらく待つ。
やがて、サイラスはオーナーに連れられて戻ってきた。
その姿ににんまりしてしまう。
「まぁ、サイラス！　とっても似合っているわ！」
サイラスの赤い目に合うように、ワインレッドのベストと黒地に赤い刺繍の入ったジャケットを選んでみたけれど、想像以上によく似合っている。サイラスはもともと綺麗な顔をしていて背も高いから、少々華美な格好をしてもちっとも服に負けていなかった。
「あの、お嬢様……。私にこんないい服はもったいないです」
「そんなことないわ。ぜひこの服を買いましょう」
せっかく似合っているというのに、サイラスは落ち着かなそうにしている。
「このようなものをいただくわけにはまいりません」
「だめよ。だってこれから行くお店には、さっきまで着ていた服で入るわけにはいかないんですもの」
「これから行く店？」

サイラスは不思議そうにしているが、やっぱり説明はしてあげない。
どこに行くか言って遠慮されたら困るのだ。
「私も着替えてくるから、ちょっと待っててね！」
「あっ、お嬢様！」
後ろからサイラスに引き止められたが、私は構わず駆け出した。
サイラスは喜んでくれるだろうか。また困らせてしまうかもしれない。
でも、美味しそうに公爵邸のごはんを食べていた姿が忘れられないのだ。
これから先のことが楽しみで仕方なかった。

第三章　面倒な第二王子

「お嬢様、こちらは……」
「サイラスについてきてもらったことはなかったかしら？　私おすすめのレストランよ。以前お兄様に連れてきてもらったところなんだけど、王族もよく利用している有名なお店なの」
「こんな高そうなところ……」
サイラスは門の前で固まっているが、構わず手を引いて店の中へ引っ張っていく。
店員に案内されテーブルへ向かう間、周りの視線がこちらに集中しているのがわかった。特に若い女の子たちは、気になって仕方ないというようにちらちら横目でこちらを見ている。
はじめはジャレッド王子に婚約破棄された私がいるので注目されているのかと思ったけれど、耳を澄ましてみるとどうもそうではないらしい。
「あの黒いジャケットの方は誰かしら？」
「すごい美形ね」
女の子たちがサイラスを見ながら小声で話しているのが聞こえてきて、思わず笑みが零れてしまう。
そうでしょう？　私の執事はかっこいいでしょう？　なんて、女の子たちのところに話しかけに行ってしまいたい気分だった。
「お嬢様、どうかなさいましたか？」
「いいえ、なんでもないわ」
サイラスに心配そうに声をかけられても、私の頬はずっと緩んだままだった。
店員に促されて窓際の席に腰を下ろす。
サイラスは席に座ってからも、「ここまでしていただくわけにはまいりません」と焦り顔で言っていた。けれどそれは笑顔で黙殺する。
私に引く気がないのを悟ったのか、サイラスも諦めたように口を噤（つぐ）んだ。やり取りが終わったのがわかったのか、店員がすぐに料理を持ってくる。
私が勧めると、ようやく運ばれてきた料理に手をつけ始めた。

「どう？　おいしい？　サイラス」
「はい。とても」
緊張しているようでサイラスの表情は硬かったけれど、時間が経つにつれしだいに表情が解（ほぐ）れていくのがわかった。特に魚介のスープは好みに合ったようで、口に入れた瞬間驚いたように目を瞬いていた。
やっとこちらから何かを渡せたわ、と満足しつつその顔を眺めていたときだった。
「おや。エヴェリーナ嬢じゃないか。兄上に婚約破棄されてさぞ気落ちしているだろうと思ったら……もう新しい男を見つけたのか？」
いい気分で食事をしていたというのに、突然頭上から不快な声が降ってきた。
見上げると、そこには従者を二人引きつれた第二王子ミリウスの姿がある。
「ミリウス様……。ミリウス様もいらっしゃっていたのですね。何かご用でしょうか？」
顔が引きつらないように気をつけながら尋ねる。
――私はこいつがとても苦手だ。苦手というか、はっきり言って嫌いだ。
この男は、私が一度目の人生で追い詰められる原因を作ったうちの一人。ジャレッド王子と同じく聖女カミリアを随分気に入っていたミリウスは、カミリアと敵対している私を毛嫌いしていた。
私が牢に入れられた時、わざわざ牢屋の前までやってきて、カミリアを苦しめた私がいかに醜い存在であり、生きている価値がないのかを丁寧に説いてくれたこともある。
思い出しただけでむかむかしてくるが、第二王子に不敬な態度を取るわけにはいかない。

向かいの席でミリウスを睨みつけているサイラスにふるふると首を振り、私は笑顔でミリウスの言葉を待った。
「どこかで見たことのある下品なピンクベージュの髪を見つけたものでな」
「まぁ、それは私のことでしょうか？　ミリウス様に見つけていただけるなんて光栄ですわ」
「誰といるのかと思ったら男と一緒で驚いたよ。新しい男は随分とまぁ……庶民的なようだな？　つい最近婚約破棄されたばかりとはいえ、公爵令嬢に取り入れば得だとでも思ったのか」
サイラスをちらりと見遣ると、ミリウスは顔をにやつかせながら言った。
瞬間、頭に血が上る。
本当に、なんて無礼な奴なんだろう。
私のことは多少失礼なことを言われても許してあげるつもりだったけれど、サイラスを侮辱するなら話は別だ。
拳を握りしめてミリウスを見ると、今度はサイラスの方が私を止めるように必死で首を横に振っているのが見えた。
今日は喧嘩をしに来たのではない。サイラスに喜んでもらうために来たのだ。
大きく息を吸い込んで気持ちを落ち着かせる。
私は笑顔を作り、首を傾げた。
「うちの執事なんですのよ。とってもかっこいいでしょう？」
そう言ったら、ミリウスは面食らったような顔をした。いつもならとっくに怒っているだろう私

が笑顔を崩さないので、調子が狂ったのだろう。
しかしそれも一瞬のことで、ミリウスはふてぶてしい態度を取り戻すと言葉を続けた。
「なるほど。王子に婚約破棄された腹いせに執事を連れ回していると」
「ミリウス殿下、失礼ながら本日は私がエヴェリーナお嬢様にお願いしてご同行いただいただけで……」
サイラスが口を挟もうとするが、私は止める。
「サイラス、いいのよ。──彼を連れ回しているのは否定できません。けれど婚約破棄された腹いせなんかではありませんわ。サイラスと出かけたかったから来ただけです。そもそもジャレッド殿下に婚約破棄されたことなんて、もう全く気にしておりませんの」
馬鹿にしたようなミリウスの顔は気にしないことにして、笑顔で言葉を返す。早く行ってくれないかなぁなんて思いながら。
「新しい男がいれば元婚約者など、どうでもいいというわけか。それはそれは、公爵令嬢ともあろうものが節操のないことだ。少しはカミリアを見習ってはどうだ？　カミリアはあまたの貴公子が求婚しても、兄上に一途だったぞ」
笑顔でいようと思ったけれど、つい顔が引きつってしまった。
この男は一回目の人生では確かに、婚約破棄後もジャレッド王子が諦められない私に向かって、「振られたのだから潔く身を引くべきだ。執念深い女は恐ろしい」なんて言っていたのだ。結局文句を言いたいだけなのだろう。

大体、カミリアが一途だなんて本気で思っているのだろうか。
カミリアはジャレッド王子だけでなくあまたの貴公子に愛嬌を振りまいていた。なんならその中の一人がミリウスだったはずなのに。
けれどそんな話をここで出すわけにもいかないので、言葉を呑み込んだ。
横目で見ると、サイラスが向かいの席で何か言いたげに肩を震わせている。
これ以上話を続けると、彼に我慢の限界がくるかもしれない。無難に切り上げるべきだ、と判断して私は頬に手を当てて穏やかに言った。
「それはよろしいことですわね。ミリウス様も、以前はカミリア様ととても親しくしておいででしたのに、婚約が決まればお兄様とカミリア様との仲を応援して差し上げるなんて。心が広いのですね」
皮肉のつもりはなかった。
しかし、カミリアと親しく、と言った瞬間からミリウスの顔はどんどん歪んでいった。
あ、これは失敗したかも、と思った時にはもう遅く、ミリウスはテーブルの上の水の入ったグラスを手に取ると、躊躇なく中身を私に浴びせかけてきた。
「馬鹿にしているのか!?　カミリアと俺はそんな仲ではない!!　──彼女は俺を利用してなどいない!!」
「ミリウス殿下！　何をなさるのですか!!　お嬢様はそんなこと言っていないでしょう!?」
サイラスが立ち上がってミリウスの腕を掴む。ミリウスの後ろに控えていた二人の従者が焦った

顔でそれぞれミリウスとサイラスを止める。
その間、私は呆然としみだらけになったドレスを見下ろしていた。
水滴が頬を伝ってぽたぽたと落ちる。
ミリウスは、サイラスを睨みつけてから、私に視線を移して鼻で笑った。
「ふん、無様な姿だな、エヴェリーナ。みんなお前のことを王子に婚約破棄された哀れな女だと話しているぞ。強がってこたえていないふりをしているようだが、いつまで持つか」
「ミリウス殿下！　これ以上お嬢様に無礼な発言をするなら公爵家から王家へ抗議を入れますよ!?」
「公爵家から抗議？　本当にそんなことができるのか？　アメル公爵はエヴェリーナが婚約破棄されたと知ると、一切庇うことなくカミリアに対しての非礼を詫びて、王家が望むなら娘とは縁を切るので許してほしいと懇願しに来たそうだが？」
ミリウスは冷たい目で私を見下ろしながら言う。
それももう知った話だった。
お父様ならそうするだろう、と私はびしょ濡れの状態でゆっくりうなずく。
「――婚約者に捨てられて親にまで切り捨てられ、本当にかわいそうな女だな」
ミリウスが吐き捨てる。
けれど、その言葉でなんとなく察しがついてしまった。
ミリウスは私にかわいそうな女でいてほしかったのだ。ジャレッド王子に婚約破棄されて、社交界での立場も悪くなり、親にまで見捨てられた哀れな女であることを望んでいる。
それはきっと、ミリウスがジャレッド王子とカミリアの婚約にショックを受けていることが原因だろう。そうでなければ私の何気ない一言にここまで激昂するはずがない。
カミリアはジャレッド王子だけでなく、ミリウスとも随分親しくしていた。何度も二人で出かけるところを見かけたし、王宮の庭でカミリアがミリウスの腕に自分の腕を絡めて歩く様子は、ただの友人同士には見えなかった。
それが突然、公の場でジャレッド王子とカミリアが婚約を宣言するのを聞かされたのだ。
王太子である兄や愛するカミリアに感情をぶつけるわけにはいかず、婚約破棄されて自分以上にみじめな立場になった私を蔑むことで溜飲を下げようとしたのだろう。
水で頭が冷えたおかげか、そんなことまで思い浮かんで、私はふうっとため息を吐いた。
それから従者に押さえ込まれつつも腕を振りほどこうとするサイラスを見つめる。
「サイラス、大丈夫よ。ただの水だし、どうってことないわ」
「しかし……！」
「本当よ。ねぇ、ミリウス様」
私はサイラスを制して、ミリウスに向き直る。
「なんだ」
「私も自分がかわいそうだと思っていました。誰も彼も憎くて、どうして私がこんな目に遭わなければならないのかわからなくて、喚き散らしたくなったこともあります」

実際、一度目の人生ではそうしたのだ。王子に何度も納得がいかないと喚き散らし、果てはカミリアの暗殺まで依頼した。私にはその権利があると思った。私は自分を憐れんでばかりいた。私を捨てたジャレッド王子が憎くて、私を陥れたカミリアが憎くて——

「でも、そうしたところで何も手に入りませんでした。もがいているうちに本当に大切なものまで失ってしまったんです。とても後悔しました」

王子とカミリアへの恨みを忘れられなかった結果、私はサイラスを死なせてしまった。彼が生きているうちはその優しさに気づくことすらなかった。

そうなって初めて自分が本当に大切にするべきものはなんだったのかを知ったのだ。

気づいたときにはもう何もかもが遅かった。

今のミリウスは、前世の私を見るようだ。私は、過去の自分を振り払うように背筋を伸ばして言いきった。

「だから、もう気にしないことにしたんです。自分を憐れむのはやめました。公爵に見捨てられたと言っても衣食住の足りた生活をさせてもらっていますし、命を脅（おびや）かされることはありませんもの。それに、婚約破棄以降色んな人が私から離れていったのも事実ですけれど……、殿下を敵に回した令嬢から距離を取るのは仕方ありませんわ。それより、変わらない態度で接してくれる人を大切にしようと思うんです」

婚約者に裏切られたことも、聖女を陥れようとした嫉妬深い令嬢だと汚名を着せられたことも、今となってはどうでもいい。それで離れていく人がいても構わない。

だって本当に大切な人は、ちゃんとここにいてくれるんですもの。

顔を上げたら、ミリウスはぽかんとした顔で私を見ていた。

サイラスもミリウスの従者たちも呆気に取られたように私を見つめている。

「お前、本当にエヴェリーナか？」

ミリウスが上擦った声で言った。

「エヴェリーナでなかったら誰だと言うんです？」

「いや、その……」

さっきまでの威勢はどこへやら、途端にミリウスの歯切れが悪くなる。

従者たちはミリウスの勢いが削がれたと見ると、慌てた様子で彼をテーブルから引き離した。従者の一人がこちらに思いきり頭を下げてくる。

「行きますよ、ミリウス様、大変なご無礼をお許しください！　後日必ずお詫びにうかがいます！」

「あ、おい、離せ！」

「ミリウス様！」

ミリウスは二人の従者に引っ張られ、部屋の向こうに消えていく。ほっと息を吐くと、サイラスが駆け寄ってきた。

「お嬢様、大丈夫ですか。冷たいでしょう。私がそばについていながら申し訳ありません……！」

「ああ、いいのよ。水くらい。サイラスのせいじゃないし」

「早く着替えましょう。風邪を引いてしまいます」

「そうね。さっきまで着ていたワンピースがあってよかったわ。……ちょっと、なんて顔をしているの？」
平気だと言っているのに、サイラスは泣きそうな顔をしていた。何度大丈夫だと言っても表情を緩めてくれない。すっかり落ち込んでいる様子だったけれど、サイラスはそれでも手早く店員に頼んで部屋を借り、馬車から街歩き用だった服を持ってきてくれた。
さすがにあの場に戻るのも気まずいので、着替えるとレストランを出てそのまま馬車に乗り込む。馬車の中でもサイラスはずっと悲しそうな顔をしていた。
その顔を見て、ずきりと胸が痛む。
「ごめんなさい。せっかく楽しい日だったのに、最後で台無しにしちゃったわね」
「お嬢様は何も悪くありません！　全てあの愚かで短慮なミリウス殿下が悪いのです！」
謝ると、サイラスはすぐさま否定してくれる。それから、顔を曇らせて消え入りそうな声で言った。
「……何もできず、申し訳ありませんでした」
どうしてサイラスが謝るのだろう。仮にもミリウスは第二王子だ。彼の横暴に対処なんてそうそうできるはずがないのだから、落ち込むことはないのに。そもそもサイラスは王子相手に止めに入ってくれたではないか。
「そんなことないわ。サイラスは止めてくれたじゃない」
「しかし」
「私は気にしてないから、サイラスももう気にしないで」
そう言って笑ったら、サイラスは何か言いたげに口を開いた後、黙ってうなずいた。
「ねぇ、サイラス。私がどうして気にしないでいられるかわかる？」
「……わかりません。お嬢様はもっと怒ってもいいと思います」
サイラスは真面目な顔で、そうきっぱり言う。
「サイラスがそうやって私の味方をしてくれるからよ。ほかの人がなんて言おうがどうでもいいと思えるの」
私がそう言ったら、サイラスは目を見開いた。
「……私はいつだってお嬢様の味方です」
「ふふ、知ってるわ」
そう言って笑ったら、ミリウスに絡まれて水までかけられた直後だというのに、なんだかまた楽しくなってきた。
サイラスがいつだって私の味方なのは知っている。なんせ罪を犯して投獄された私を見捨てなかったくらいなのだから。
サイラスはまだ心配そうな顔をしていたけれど、私はお屋敷に着くまでずっとにこにこ笑っていた。

その後も私は、サイラスが休日になると色んな場所に連れ回して、色んなプレゼントを贈って、楽しく過ごし続けた。あまり高価な物を渡すと受け取ってくれないことに気づいてからは、それほど値段が高くなくてサイラスの気に入りそうな物をプレゼントすることにしている。

はじめは困り顔だったサイラスも最近は楽しそうに受け取ってくれるので、私は大変満足していた。

パーティーに出るとまだひそひそ言われるし、近づいてくる人は以前と比べて明らかに減ったけれど、そんなのは些細なことだ。

自由に外を歩けて、サイラスも生きていて、ほかに何を望むことがあるというのだろう。

「あー、なんて幸せなのかしら！」

公爵家の自室でソファに腰掛けながら呟く。

カミリア暗殺未遂を企てて無実のサイラスを代わりに死なせ、最後には自ら命を絶った私が、こんな幸せを享受していいのかと心配になってしまうくらいだ。

巻き戻る前、一度目の人生は本当に真っ暗な気持ちだった。もう幸せを感じられることなんて二度とないと思っていたのに。

私はそんなことを考えながら、ソファに大きくもたれかかる。

目を閉じると、今はもう随分遠く感じる悲しかった日々の記憶が浮かんできた。

＊＊＊

私の最初の人生がおかしくなり始めたのは、一体いつの頃からだったのだろう。

やはりジャレッド王子の婚約者になった日からだろうか。

あの日から、私の平和で甘く幸せな世界は、だんだんと厳しくて冷たいものに変わっていった。

ジャレッド王子と婚約するまでの私は、とても幸せな少女だったように思う。

私の家族は私に無関心だったけれど、その分使用人たちが可愛がってくれたから寂しくはなかった。それに、サイラスがいつもそばにいてくれたので、毎日笑って過ごすことができた。

「サイラス！　お庭で花冠を作りたいから一緒に来てちょうだい！」

「かしこまりました。お嬢様はお庭がお好きですね」

私が頼むと、サイラスは笑ってついてきてくれる。

私はアメル邸の広いお庭に出るのが大好きだった。お花や小動物を見るのも好きだったけれど、一番の理由はサイラスが私の見つけたものひとつひとつを驚いた顔で見てくれるからだ。

その日も私たちは一緒にお庭に出て、花冠を作るためにお花を摘んでいた。

花の茎を編み込んで、冠の形に編んでいく。私はなかなかうまく作れなくて完成させることすらできなかったけれど、サイラスは器用に茎を織り込んで、あっという間に綺麗な花冠を完成させてしまった。

「すごい！　とっても綺麗ね」
「ありがとうございます」
私が感動して声を上げると、サイラスは照れたように笑った。それからふわりと私の頭に花冠を被せる。
「えっ？　くれるの？」
「お嬢様のお邪魔でなければ……」
「邪魔なわけないでしょ！　嬉しい！」
綺麗な花冠を被せられて、私ははしゃいでくるくる回った。
サイラスはそんな私を楽しそうに見ている。
「お嬢様はお花がよく似合いますね」
目を細めてそんな風に言われ、私はとっても嬉しくなってしまった。
あの頃の私にとって、サイラスに遊んでもらっている時間が一番楽しい時間だった。

私が初めてサイラスに会ったのは八歳の時のことだ。その時サイラスは九歳で、アメルのお屋敷に来たばかりだった。
ある日、私が家庭教師の授業を抜け出してお庭で遊んでいるときに、壁際でうずくまっている少年を見つけた。それがサイラスだった。
その時のサイラスは随分落ち込んでいる様子だったので、私は歌を歌ったりお話を聞かせたりし

て励ましてあげた。そのおかげでサイラスも明るい表情になってくれた。
……当時は私のおかげで元気になったのだと思っていたけれど、今考えると確実に主の家の娘だから気を遣われていたんだろう。
年の近い子供がお屋敷に来たのが嬉しくて仕方なかった私は、その日以降しょっちゅうサイラスの元を訪れた。
私の家族はお互いに無関心だ。お父様はお金と権力のことしか考えておらず、お母様は美容と宝石のことで頭がいっぱい。二人のお兄様も私のことなんてどうでもよさそうで、寂しいとまでは思わなかったけれど、いつもつまらなく感じていた。
そんな中いつでも私に構ってくれたサイラスに、私はあっという間に懐いてしまった。
お屋敷でサイラスを見つけると飛んでいき、彼が執事になって以降は夜中でも寂しくなるとベルを鳴らして呼び出した。
サイラスはそんな私のわがままをいつも笑って聞いてくれた。
——平和な日々を送っていた中、ある日私はお父様に呼び出された。
「エヴェリーナ！　陛下からお前を第一王子のジャレッド殿下の婚約者にしたいという話をいただいたぞ！　このままいけばアメル家から王妃を出すことができるかもしれん！」
「ジャレッド殿下？」
婚約について話すお父様は随分と興奮していた。当時の私にも王妃様がすごい存在だということくらいはわかっていたけれど、あまり興味は湧かなかった。

「エヴェリーナ、すぐに支度しろ。今から王宮へ向かうぞ」
「え？　今からですか？」
「当然だ。もたもたしている間にほかの貴族に出し抜かれては困る」
　お父様はそう言うと、私を侍女に押しつけてご機嫌で支度を始めた。私は侍女に連れられて、持っている中でもかなり上等なドレスに着替えさせられる。
「このドレス、動きにくくて苦手なんだけど」
「よくお似合いですよ。王子殿下にお会いするのですから、きちんとした格好をなさらないと」
　文句を言っても、侍女は笑顔のまま、有無を言わせずドレスを着せてくる。
　せめてサイラスも一緒に連れていきたかったのに、支度が終わるとすぐに馬車に引っ張っていかれたせいで、ほかの場所で仕事をしていたサイラスを呼ぶ暇もなかった。
　私は状況をろくに理解できないまま、王宮へ連れていかれてしまった。
　王宮に着くと、お父様と応接室で待たされた。
　着慣れないきっちりしたドレスを着せられて強引に王宮まで引っ張ってこられたので、私は大変不満だった。ぶすっとしながらソファに座っていると、お父様にもっとにこやかにしていなさいと叱られる。それで余計に不機嫌になった。
　早く顔合わせなんて終わらないかしら。帰ってサイラスと遊びたいわ。
　ソファで足をぶらぶらさせながらそんなことを考えていると、突然扉が開いた。
　騎士服の男の人二人を後ろに従えて、私と同じくらいの年の少年が入ってきた光景を、今でもよ

く覚えている。
「お待たせしてすまない。私はリスベリア王国の第一王子ジャレッド・ハーディングだ」
　少年はそう言うと、私とお父様のほうを見て微笑んだ。
　ジャレッド王子の姿を初めて見たとき、あまりの美しさに私は言葉を失ってしまった。
　金色の髪に青い目で、まるで絵本に出てくる王子様みたいな人だった。本当にこんな人が実在するのかと信じられない気持ちになる。
「――私たちはこれから婚約者になるそうだ。よろしくね、エヴェリーナ」
　ジャレッド王子はそう言って私に右手を差し出した。
　私はその短い間に、すっかりジャレッド王子のことが好きになってしまった。

　顔合わせが終わりお屋敷に帰った私は、すぐさまサイラスの元へ駆けていった。
「サイラス、聞いて！　私、今日王子様に会ったのよ。金色の髪に青い目をしていて、絵本に出てくる王子様そのままなの！　私、将来あの人と結婚するんですって！」
　興奮しながらそう報告する。できることならサイラスもあの場にいて、一緒にジャレッド王子を見て驚いてほしかった。本当に美しい王子様だったのだ。
　話を聞いたらきっとサイラスも喜んでくれると、あの頃の私は思っていた。でもサイラスは私がそう口にした瞬間固まってしまった。
「どうかしたの？」

「いえ、なんでもありません。少し驚いてしまって」
「それは驚くわよね！　私もびっくりしたわ」
興奮冷めやらないまま、お父様に突然呼ばれた経緯を説明する。しかし、普段は私の話を真剣に聞いてくれるサイラスは、なんだか心ここにあらずの様子に見えた。
「どうしたの、何か嫌なことでもあったの？　元気がなさそうね」
「いえ、そういうわけでは」
サイラスは否定するけれど、どう見ても様子がおかしい。
もしかしたら、私が出かけている間に何か嫌なことでもあったのかもしれない。私は一人ではしゃいでいたことを反省し、少し休憩しましょうと提案した。
しかしサイラスは笑って首を横に振る。
「本当に心配なさらないでください。お嬢様が未来の王妃様になられるなんて、専属執事として私も大変嬉しいです。お嬢様ならきっと素晴らしい王妃様になられますね」
サイラスはいつもの笑顔でそう言ってくれた。表情にさっきまでの曇りは見られない。
私は嬉しくなって何度もうなずいた。

＊＊＊

それからは日常が一変した。
日々の時間の全てが王子妃になるための勉強にあてられるようになった。
それまでの優しい家庭教師は、王宮から派遣されてきた厳しい教師に交代させられた。横で見張られながら毎日山積みの課題をこなす。語学の勉強にピアノのお稽古、礼儀作法に舞踏のレッスン。やるべきことは日に日に増えていく。
家庭教師の先生の授業が終わると、私は毎回ぐったりとベッドに倒れ込んだ。授業が終わる頃には、いつも外はすっかり暗くなっている。
「疲れた……王妃様になるのって大変なのね……」
ベッドの上で、暗くなった窓の外を眺めながら呟く。王妃様になるのがこんなに大変なことだとは知らなかった。
「で、でも、これくらいで音を上げるわけにはいかないわ！　私はジャレッド様の婚約者なんですもの！」
気合を込めてわざと声に出して言った。
王子殿下の婚約者になったのだから、こんなことで負けてはいられない。
いつの間にか、私はそう思うようになっていた。

お勉強やマナーレッスンに必死で取り組んで、どうにか慣れてきたある日のこと。
私はリーシュの神殿に呼び出された。リーシュの神殿は、リスベリア王国の建国に関わったとされる女神リーシュ様を祀る神殿だ。王国にいくつかある神殿の中でもっとも位が高く、偉い聖職者様たちが集まっている。
建国神であるリーシュ様は、愛を司ってもいる。
だから王子妃になる者は、神殿でリーシュ様にご挨拶することになっていたのだ。その際、女神様に忠誠の証を捧げるらしい。
証とはなんだろうと不思議に思いながらも、私は言われるままに神殿へ向かった。
神殿に到着すると、銀色の髪をした神官様が出迎えてくれた。お父様と同じくらいの年齢に見えるその神官様は厳しい表情をしていて、少し怯んでしまう。
「エヴェリーナ様、よくお越しくださいました」
「エヴェリーナ様には今から礼拝堂でリーシュ様にご挨拶をしていただきます」
「はい、わかりました」
私はちょっとドキドキしながら神官様についていった。
礼拝堂に到着すると、中はがらんとして誰もいなかった。普段、礼拝に来るときは大勢の人で賑わっているけれど、今日は貸し切りにしているらしい。
神官様は私を女神様の像の前まで連れていく。
腰まである長い髪をした美しいリーシュ様の像はどこか憂いを帯びた表情で目を伏せていた。

像に見惚れていると、神官様に呼ばれる。
「エヴェリーナ様。こちらへよろしいですか」
「はい」
神官様に呼ばれ振り返る。神官様の前にある祭壇の上には、装飾の施されたナイフとガラスの小瓶が載っていた。
「それはなんですか？」
「次期王子妃となる方は、しきたりでリーシュ様に自らの血を捧げることになっております。エヴェリーナ様もご協力をお願いいたします」
「えっ」
私はぎらぎら光るナイフに視線を向ける。鋭い刃は随分と痛そうだ。
「まさか、そのナイフを使うわけではありませんよね……？」
「腕にほんの少し傷をつけるだけです。治癒魔法できちんと傷痕一つなく治しますからご安心ください」
「そ、それ、やらなくてはいけませんか？」
「しきたりですから」
神官様は有無を言わせず言う。心底嫌だったけれど、私は観念して右腕を差し出した。
「ひと思いにやってしまってください……！」
「失礼いたします」

立ち読みサンプル
はここまで